

《研究報告》

1～2か月児を育てる母親の悩みや問題と感情の関連

肥田 佳美, 大塚 敏子, 大比 叡和子

相山女学園大学看護学部

要 旨

目的：乳児を育児する母親の悩みや問題を把握し、母親の感情との関連を明らかにして母親が日々良好な感情で育児が行えるように、保健師等育児支援者の役割について検討する。

方法：A県5市5町の1～2か月児を育児する母親に質問紙調査を実施した。母親の悩みや問題（8カテゴリー・37項目）と母親の感情（フェイススケール5件法）を集計し両者の関連を分析した。

結果：母親の感情を良好群と良好以外群に分類し感情良好群（以下、良好群）は47.9%であった。悩みや問題で最も多かった下位項目は「湿疹・乾燥肌への対処」34.8%であった。約6割の下位項目で出生順位による有意差を認めた。カテゴリーでみると感情良好以外群（以下、良好以外群）は良好群に比して児の【肌トラブル】、児の【泣き】、【本人や家族】、【授乳】を悩みや問題として選択した割合が大変高かった（ $p<0.001$ ）。育児の情報源を「人」から選択した母親は良好群49.3%、良好以外群33.0%で良好群が有意に高かった（ $p<0.001$ ）。

結論：1～2か月児の母親の8割以上が育児等の悩みや問題を抱えていた。また、母親の感情と育児の情報源に関連がみられた。良好群は家族や友人等の「人」から得る情報の割合が良好以外群より高く、良好以外群はインターネット・SNSといった「人以外」からの情報が良好群より高く、両者に育児情報の種類による有意差がみられた（ $p<0.001$ ）。これらのことより、保健師等が行う乳児家庭全戸訪問事業を早期にアウトリーチ型事業として実施することが母親の育児不安の軽減や、育児肯定感の向上につながり、早期の支援が今後の母子の健康によりよい経過をもたらすことが本研究から示唆された。

キーワード：育児、悩みや問題、母親の感情、育児の情報源、乳児家庭全戸訪問事業

I. 緒言

少子高齢社会の加速で日本の将来の労働力不足は深刻な問題である。労働を担う女性の活躍が期待され育児期の女性においては、労働力推進を図りながら育児負担が軽減するような取り組みが推進されている。育児に関する経済的支援・教育費負担の軽減、仕事と子育てを両立するための働き方改革、男性の家事・育児参画の促進、育児の担い手の多様化と世代間での助け合いなど国を挙げて多くの施策が打ち出されている（内閣府、2020）。女性の年齢階級別労働力率をみると昭和～平成時代は育児期に労働力率が落ち込みその後回復するM字カーブを描いていたが、令和3年にはM字の底が上がり女性の就業率は確実に上昇した（総務省、2022）。一方、合計特殊出生率は第二次ベビーブーム期にある1973年の2.14をピークに年々低下し、2020年は1.33と過去最低の数字を更新している（内閣府、2022）。育児の協力者は、かつては同居の祖父母などであったが、三世帯世帯は年々減少し2021年は全世帯の4.9%（厚生労働省、2021）となり協力を得ることが難しい時代となった。家事・育児は家族（夫）と分担し地域や企業が女性の労働と子育てを

支援している。育児サービスの中でも保育所へのニーズは高く延長・夜間・休日保育など子どもを長時間保育所に預ける家庭も増え続けている（厚生労働省，2020）。共働き家庭では、物理的に日常子どもと接する時間、夫婦の日常会話、ママ友との交流時間は制限される。Bowlby（1969）の愛着理論では子どもは出生直後から母親との相互交渉から母子間に情緒的な絆すなわち愛着を形成していくとされている。現在の母親にとって子どもとの愛着を深められる時間は限られているが、特に乳児期は母子の信頼関係を築く大切な時期であるため、まずは母親が安心して前向きな気持ちで育児できる環境や支援が必要であると考え、本研究では、母親の育児に関する悩みや問題だと思っていることは何かを知り、母親が日々の育児でどのような感情を抱いているのか、また、その感情に関連する要因は何かを明らかにし、保健師の役割について検討することを本研究の目的とする。都築と金川（2001）は、産後から4か月児健診までの間で一番不安だった時期を第1子の母親が生後2か月まで、第2子以上が生後3か月までと報告している。この報告も踏まえ、本研究の対象は現在まで知見が少ないと思われる1～2か月児を育児する母親とした。

II. 方法

1. 対象・方法

A県5市5町のこにちは赤ちゃん訪問の対象事例で1～2か月児を育児する母親2,852人を対象とした。出生時体重が2,500 g未満の低体重児、多胎児は除外した。各市町の訪問調査員（保健師、助産師、保育士等の専門職）が母親に無記名自記式質問紙調査用紙を配布し、倫理的配慮のもと研究説明書を配布し口頭で説明を行い、同意のもと調査協力と郵送での回収を依頼した。

2. 調査期間

2018年3月～2018年7月

3. 調査項目

調査項目は、A県が行う県内各自治体の3か月児健康診査の結果報告書と文献等を参考に独自に決定し、対象の属性、夫の育児への協力、育児の相談者、育児の情報源、育児中の母親の悩み・問題、母親の感情（フェイススケールによる5件法）等とした。

4. 分析方法

主に育児中の母親の悩み・問題と現在の母親の感情を調査し、兄の出生順位（第1子と2子以降）で比較を行い、さらに母親の悩み・問題と感情の関連をみた。母親の悩み・問題は、8カテゴリー37の下位項目を設定し質問した。以下、カテゴリー項目は【 】, 下位項目は「 」で表記する。各カテゴリーにおける下位項目数は【発育・発達】7項目、【栄養】5項目、【排便】4項目、【児の泣き】5項目、【肌のトラブル】4項目、【疾病に関すること】4項目、【育児支援】3項目、【本人・家族】5項目とした。下位項目については複数回答とし、カテゴリーは実人数（下位項目で1つ以上有と回答した人数）で集計を行った。母親の現在の感情はフェイススケールを使用した。5件法で母の現在の感情に問いかけ番号順に1良好、2やや良好、3どちらともいえない、4やや不良、5不良と操作的定義を行った（図1）。母親の感情を2群で分析する際は、1良好を良好群とし、2やや良好～5不良までを良好以外群とした。統計解析は、IBM SPSS Statistics ver27.0 for windowsを用いた。平均値の比較はt検定を用い、悩みや問題、母親の感情、他の項目間の関係性を χ^2 検定、Mann-Whitney-U検定、Spearmanの相関係数を用いて分析した。有意水準は、 $p<0.05$ とした。



図1 フェイススケール

5. 倫理的配慮

研究倫理審査委員会の承認を受けて実施した（日本福祉大学「人を対象とする研究」に関する倫理審査委員会 承認番号18-15）。訪問調査員が本研究の目的や方法，プライバシー保護，研究協力の同意や撤回方法，撤回による不利益はないこと等について対象に文書を渡し口頭で説明した。研究協力の同意は質問紙の回収をもってみなすことを両者で確認した。

Ⅲ. 結果

1. 対象の属性等（表1）

質問紙の回収は対象者2,852件中1,574件（55.2%）で，そのうち低体重児や多胎児などを除き本研究の対象は1,280件（44.9%）であった。母親の平均年齢は31.2（±4.69）歳，父親は33.0（±5.47）歳であった。児の平均出生時体重は3,090（±325.6）gであった。児の出生順位は，第1子555人（43.7%），第2子488人（38.5%），第3子185人（14.6%），第4子以降41人（3.2%）で第1子が約4割，第2子以降が約6割であった。家族構成は，核家族1,132人（90.4%），3世代家族104人（8.3%），その他16人（1.3%）で，核家族が約9割であった。児の月齢は1か月891人（69.6%），2か月389人（30.4%）であった。母親の就労（育児休暇中も含む）は，専業主婦が684人（53.8%）で最も多く，正規職員410人（32.2%），非正規職員130人（10.2%），自営業33人（2.6%），その他15人（1.2%）であった。栄養方法は，母乳が最も多く596人（46.6%），次いで混合583人（45.6%），人工99人（7.8%）であった。出生順位でみると第1子は混合が最も多く53.6%，次いで母乳38.6%，人工7.8%で，第2子以降は母乳が最も多く53.6%，次いで混合38.8%，人工7.6%であった。

2. 夫の育児への協力，育児の相談者，育児の情報源

夫の育児協力は，よくする904人（71.1%），時々協力する335人（26.4%），殆ど協力しない21人（1.7%），なし11人（0.8%）で約98%のパートナーが育児に協力していた。母親の育児に関する相談者の有無は，有りが1,270

表1 対象の属性等

項目	人(%)
母の年齢(M±SD) n=1,280	31.2 (±4.69)
出生時体重(M±SD) n=1,280	3,090.0 (±325.6)
出生順位	第1子 555(43.7)
n=1,269	第2子以降 714(56.3)
家族構成	核家族 1,132(90.4)
n=1,252	3世代 104(8.3)
	その他 16(1.3)
就労状況	
n=1,272	専業主婦 684(53.8)
	正規職員 410(32.2)
	非正規職員 130(10.2)
	自営業 33(2.6)
	その他 15(1.2)
児の月齢	1か月 891(69.6)
n=1,280	2か月 389(30.4)
栄養方法	母乳 596(46.6)
n=1,278	混合 583(45.6)
	人工 99(7.8)
夫の育児協力	よくする 904(71.1)
n=1,271	時々する 335(26.4)
	殆どなし 21(1.7)
	なし 11(0.8)
育児相談者	有 1,270(99.3)
n=1,279	無 9(0.7)
育児相談者数(M±SD) n=1,061	4.1(2±2.33)
育児の情報源	ネット・SNS 592(54.1)
n=1,095	家族 283(25.8)
	友人知人 143(13.1)
	書籍 46(4.2)
	専門職 22(2.0)
	その他 9(0.8)
母の感情	良好 610(47.9)
n=1,275	やや良好 553(43.4)
	どちらともいえない 92(7.2)
	やや不良 17(1.3)
	不良 3(0.2)

人（99.3%），無しが9人（0.7%）であった。有りの人の相談者数は1人～30人で平均相談者数は4.1（±2.3）人であった。育児に関する情報源は，ネット・SNSが592人（54.1%）で最も多く，次いで家族283人（25.8%），友人・知人143人（13.1%），書籍46人（4.2%），専門職22人（2.0%），その他9人（0.8%）であった。

3. 母親の感情

母親の感情は，良好610人（47.9%），やや良好553人（43.4%），どちらともいえない92人（7.2%），やや不良17人（1.3%），不良3人（0.2%）で，良好と回答した母親が約5割で最も多く，不良に向かうにつれ割合が徐々に下がった。5段階の回答を2群に分けてみると良好群610人（47.9%），良好以外群665人（52.1%）であった。

4. 育児中の母親の悩み・問題

全体の83.9%と8割以上の母親が育児等に関する何らかの悩みや問題を抱えていた。子育てで心配なことをカテゴリー別でみると多い順に【肌トラブル】532人（41.6%），【栄養】459人（35.9%），【疾病に関すること】431人（33.7%），【排便】413人（32.3%），【育児サービス】387人（30.3%），【母親自身・家族に関すること】367人（28.7%），【発育・発達】364人（28.4%），【児の泣き】246人（19.2%）であった。下位項目については，図2のとおりで1割以上が心配と回答した内容は，「湿疹・乾燥肌」446人（34.8%）が最も多く，次いで「授乳の過不足」368人（28.7%）であった。「授乳の過不足」の選択者を栄養法で比較すると混合栄養38.6%，その他の栄養20.5%で混合栄養の割合が有意に高く（ $p<0.001$ ），出生順位では第1子46.5%，第2子以降15.0%で第1子が有意に高かった（ $p<0.001$ ）。「排便回数が少ない（便秘）」を選択した母親は310人（24.2%），「予防接種」は253人（19.8%），「保育所入所」は244人（19.1%），「受診のタイミング」は187人（14.6%），「遊び場所」は184人（14.5%），「発

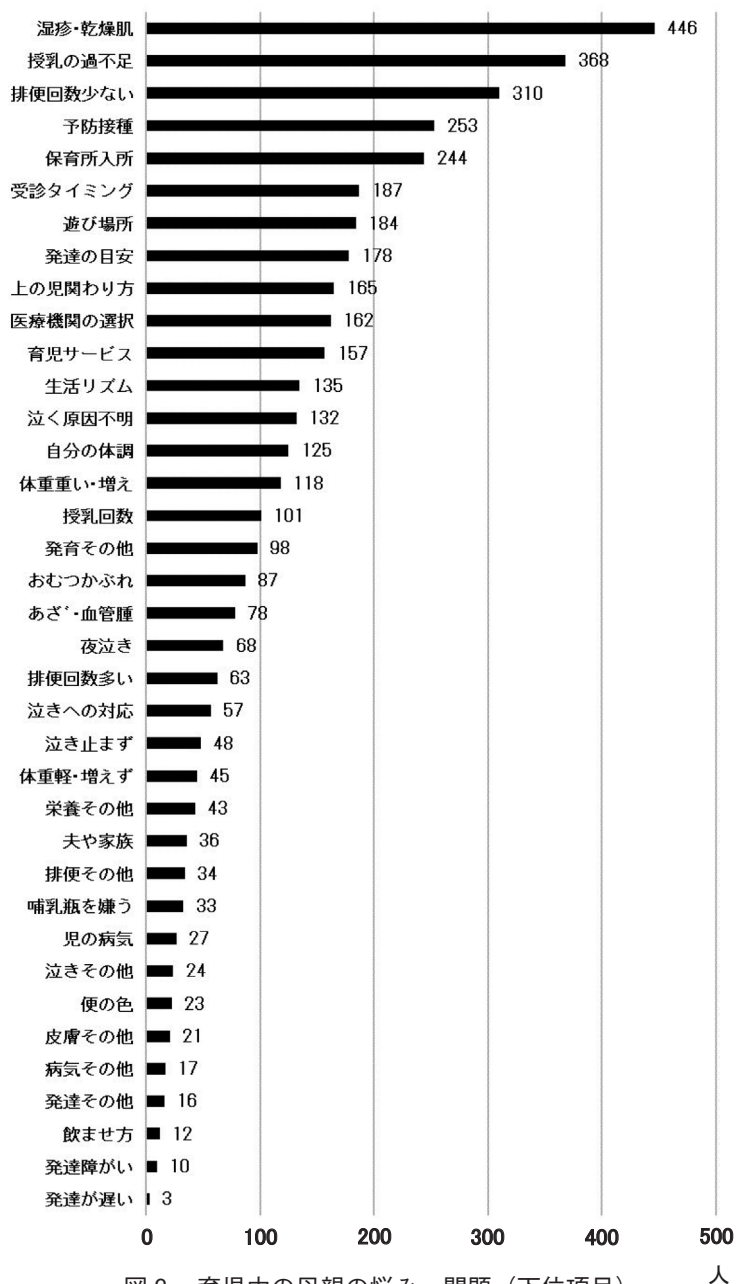


図2 育児中の母親の悩み・問題（下位項目）

達を目安」は178人（13.9%）,「医療機関の選択方法」は162人（12.7%）,「その他の育児サービス」は157人（12.3%）,「生活リズム」は135人（10.5%）,「泣く原因が不明」は132人（10.3%）であった。なお,第2子以降を育児する母親は714人でそのうち163人（22.8%）が「上の児への関わり方」を選択していた。また,「特に心配や困ったことなし」を選択した母親は204人（15.9%）であった。

5. 出生順位別育児中の母親の悩み・問題

1) 出生順位別属性・育児の情報源・育児の相談者数の比較

出生順位は第1子555人（43.7%）,第2子以降714人（56.3%）であった。第1子を育児する母親（以下,第1子）の年齢は29.9（ ± 4.8 ）歳,第2子以降を育児する母親の年齢（以下,第2子以降）は32.1（ ± 4.4 ）歳で後者の年齢が高かった（ $p < 0.05$ ）。就労有の母親は,第1子286人（51.8%）,第2子以降298人（42.0%）で第1子を育児する母親が有意に就業率が高かった（ $p < 0.001$ ）。最も多い育児の情報源は,ネット・SNS 592人（54.1%）,次いで家族283人（25.8%）,友人・知人143人（13.1%）,書籍46人（4.2%）,専門職22人（2.0%）,その他9人（0.8%）であった。家族や友人など人的なものインターネットなど人的以外のものに分けて比較すると,第1子は人的な情報源が34.4%,第2子以降は46.4%で第2子以降に人的資源を選択する母親が有意に高かった（ $p < 0.001$ ）。育児の相談者の平均人数は第1子3.9（ ± 1.95 ）人,第2子以降4.3（ ± 2.57 ）人で第2子以降の方が相談者の人数が多かった（ $p < 0.01$ ）。父親の年齢,家族構成,児の出生時体重,父親の育児への協力状況による母親の感情に有意な差はなかった。

2) 出生順位別育児中の母親の悩み・問題の比較（表2）

母親一人当たりの悩みや問題の下位項目選択数の平均は2.9（ ± 2.89 ）項目であった。

(1) 【肌トラブル】の下位項目

「湿疹・乾燥肌への対処」を選択した母親は8カテゴリー全ての下位項目の中で最も高かった。出生順位でみると第1子256人（46.1%）,第2子以降185人（25.9%）で第1子が有意に高かった（ $p < 0.001$ ）が,第2子以降においても約3割の母親が選択をしていた。他の項目は1割に満たなかったが,第1子が有意に高かった項目は「おむつかぶれへの対処」第1子51人（9.2%）,第2子以降35人（4.9%）（ $p < 0.01$ ）,「あざ・血管腫」第1子43人（7.7%）,第2子以降35人（4.9%）（ $p < 0.05$ ）であった。

(2) 【栄養】の下位項目

「授乳の過不足」を選択した母親がカテゴリーで最も多く第1子258人（46.5%）,第2子以降107人（15.0%）（ $p < 0.001$ ）で第2子以降においても1割以上が選択していた。他の項目は1割に満たなかったが,「授乳回数」第1子72人（13.0%）,第2子以降29人（4.1%）,「飲ませ方」第1子11人（2.0%）,第2子以降1人（0.1%）で何れも第1子が有意に高かった（ $p < 0.001$ ）。

(3) 【疾病に関する】下位項目

「予防接種」が最も割合が高く第1子193人（34.8%）,第2子以降57人（8.0%）,次いで「受診のタイミング」第1子157人（28.3%）,第2子以降28人（3.9%）,「医療機関の選択方法」第1子135人（24.3%）,第2子以降27人（3.8%）で何れの項目においても第1子が有意に高かった（ $p < 0.001$ ）。

(4) 【排便】の下位項目

「排便回数が少ない」が最も割合が高く第1子141人（25.4%）,第2子以降168人（23.5%）で両者に有意な差はみられなかった。「排便回数が少ない」を栄養法別にみると母乳のみで育てている母親は,そうでない母親と比較して選択者が有意に低かった（ $p < 0.001$ ）。

表2 出生順位別育児中の母親の悩み・問題

n=1,269

カテゴリー	下位項目	人 (%)	第1子 (n=555) n (%)	第2子以降 (n=714) n (%)	P値 (出生順)
発育 発達	体重が重い・増えすぎ	118(9.3)	60(10.8)	58(8.1)	0.102
	体重が軽い・増えない	45(3.5)	24(4.3)	21(2.9)	0.186
	発達が遅い	3(0.2)	3(0.5)	0(0.0)	0.083
	発達の目安	177(13.9)	149(26.8)	28(3.9)	<0.001***
	発達障がい	10(0.8)	7(1.3)	3(0.4)	0.115
	その他	16(1.3)	8(1.4)	8(1.1)	0.611
栄養	授乳の過不足	365(28.8)	258(46.5)	107(15.0)	<0.001***
	授乳回数	101(7.9)	72(13.0)	29(4.1)	<0.001***
	飲ませ方	12(0.9)	11(2.0)	1(0.1)	<0.001***
	哺乳瓶を嫌う	33(2.6)	23(4.1)	10(1.4)	<0.01**
	その他	43(3.4)	23(4.2)	20(2.8)	0.188
排便	回数が多い	63(4.9)	32(5.8)	31(4.3)	0.247
	回数が少ない	309(24.3)	141(25.4)	168(23.5)	0.440
	便の色	23(1.8)	15(2.7)	8(1.1)	<0.05*
	その他	34(2.7)	25(4.5)	9(1.3)	<0.001***
泣き	夜泣き	68(5.3)	50(9.0)	18(2.5)	<0.001***
	泣き止まず	48(3.8)	35(6.3)	13(1.8)	<0.001***
	泣く原因不明	129(10.2)	113(20.4)	16(2.2)	<0.001***
	対応方法	55(4.3)	48(8.6)	7(1.0)	<0.001***
	その他	24(1.9)	12(2.2)	12(1.7)	0.532
肌トラブル	湿疹・乾燥肌への対処	441(34.8)	256(46.1)	185(25.9)	<0.001***
	おむつかぶれへの対処	86(6.8)	51(9.2)	35(4.9)	<0.01**
	あざ・血管腫	78(6.1)	43(7.7)	35(4.9)	<0.05*
	その他	21(1.7)	9(1.6)	12(1.7)	0.935
疾病に関する こと	受診のタイミング	185(14.6)	157(28.3)	28(3.9)	<0.001***
	医療機関の選択方法	162(12.8)	135(24.3)	27(3.8)	<0.001***
	児の病気	27(2.1)	15(2.7)	12(1.7)	0.211
	その他	17(1.3)	4(0.7)	13(1.8)	0.091
	予防接種	250(19.7)	193(34.8)	57(8.0)	<0.001***
育児支援	遊び場所	184(14.5)	134(24.2)	50(7.0)	<0.001***
	保育所の申込み	242(19.1)	168(30.3)	74(10.4)	<0.001***
	その他の育児サービス	154(12.1)	122(22.0)	32(4.5)	<0.001***
本人や家族 のこと	自分の体調	125(9.9)	80(14.4)	45(6.3)	<0.001***
	パートナーや家族	36(2.8)	21(3.8)	15(2.1)	0.073
	上の児への関わり方	163(22.8)	—	163(22.8)	—
	生活リズム	134(10.6)	102(18.4)	32(4.5)	<0.001***
	その他	38(3.0)	19(3.4)	19(2.7)	0.429
悩み・問題は特になし		204(16.1)	52(9.4)	152(21.3)	<0.001***

・検定は χ^2 検定ないしFisherの直接確立法

・有意に関連のあった項目を*** (0.1%未満)、** (1%未満)、* (5%未満) と印した。

(5) 【育児支援】の下位項目

「保育所の申込み」が最も割合が高く第1子168人(30.3%)、第2子以降74人(10.4%)であったが第2子以降も1割以上が選択をしていた。次いで「遊び場所」第1子134人(24.2%)、第2子以降50人(7.0%)、「その他の育児サービス」第1子122人(22.0%)、第2子以降32人(4.5%)で全ての下位項目において第1子の割合が有意に高かった($p<0.001$)。

(6) 【本人や家族のこと】の下位項目

「上の児への関わり方」については、第2子以降の母親のみの回答であったが、163人(22.8%)と約2割の母親が選択した。児の「生活リズム」第1子102人(18.4%)、第2子以降32人(4.5%)、「自分の体調」第1子80人(14.4%)、第2子以降45人(6.3%)で何れも第1子が有意に高かった($p<0.001$)。

(7) 【発育・発達】の下位項目

「発達の目安」が最も多く177人(13.9%)であった。第1子149人(26.8%)、第2子以降28人(3.9%)で第1子の割合が有意に高かった($p<0.001$)。また、体重に関すること、発達が遅い、発達障がいへの悩みや問題は全て1割未満で出生順位による差はみられなかった。

(8) 【泣き】の下位項目

「泣く原因が不明」が最も多く第1子113人(20.4%)、第2子以降16人(2.2%)で第1子の割合が有意に高かった($p<0.001$)。「夜泣き」、「泣き止まず」、「対応方法」を選択した母親は1割に満たなかったが、何れの項目も第1子が有意に高かった($p<0.001$)。

(9) 「悩み・問題は特になし」

全ての項目において「悩み・問題は特になし」と回答した母親は204人(16.1%)で第1子52人(9.4%)、第2子以降152人(21.3%)で第2子以降の割合が有意に高かった($p<0.001$)。また、本回答を良好群と良好以外群と比較すると、良好群141人(68.4%)、良好以外群65人(31.6%)で良好群の回答者が有意に高かった($p<0.001$)。

3) 母親の感情と基本属性・下位項目との関連(表3)

母親の感情は、良好610人(47.9%)、やや良好553人(43.4%)、どちらともいえない92人(7.2%)、やや不良17人(1.3%)、不良3人(0.2%)であった。カテゴリー毎に心配・困りごとの総項目数をみると、カテゴリー数が増加するほど母親の感情が不良に向かい両者に有意な関連がみられた($p<0.001$)。

(1) 母親の感情と基本属性

家族構成で良好以外群をみると3世代家族41人(39.4%)、その他家族535人(53.5%)で3世代以外の家族が有意に高かった($p<0.01$)。児の出生順位、母親の年齢、母親の就労状況については両群に差はみられなかった。

(2) 母親の感情と悩み・問題(下位項目)との関連

母親の感情と下位項目選択数の平均値をみると良好群は2.24(± 2.52)で良好以外群は3.46(± 3.07)で有意な差がみられた($p<0.001$)。また、母親の感情を5段階でみると母親の感情が不良に向かうことと下位項目数の増加に有意な関連があった($p<0.001$)。良好以外群で悩みや問題が最も多い項目は「湿疹・乾燥肌への対処」271人(40.4%)、次いで「授乳の過不足」226人(33.7%)で何れも良好以外群が良好群より有意に高かった($p<0.001$)。なお、カテゴリーの下位項目すべてにおいて有意な差がみられたのは、【泣き】、【育児支援】、【本人や家族のこと】(何れも $p<0.001$)であった。

表3 母親の感情と基本属性・下位項目との関連 (n=1,275)

項目	気持ち良好群		気持ち良好以外群		P値	
	n=610		n=665			
	n	%	n	%		
【基本属性】						
出生順位 第1子	256	46.1	299	53.9	0.355	
第2子以降	348	48.1	366	51.9		
母の年齢30歳未満	250	53.3	219	46.7	<0.01	**
30歳以上	359	44.8	443	55.2		
母の就労 有	327	47.8	357	52.2	0.856	
無	271	47.3	302	52.7		
家族構成 三世代	63	60.5	41	39.4	<0.01	**
その他	547	46.5	535	53.5		
【困り事・心配事】※複数回答						
体重が重い・増えすぎ	42	6.9	78	11.6	<0.01	**
体重が軽い・増えない	23	3.8	22	3.3	0.637	
発達が遅い	2	0.3	1	0.1	0.509	
発達の目安	60	9.8	119	17.8	<0.01	**
発達障がい	3	0.5	7	1	0.262	
授乳の過不足	142	23.3	226	33.7	<0.001	***
授乳回数	25	4.1	76	11.3	<0.001	***
飲ませ方	5	0.8	7	1	0.676	
哺乳瓶を嫌う	15	2.5	18	2.7	0.798	
便回数が多い	20	3.3	43	6.4	<0.05	*
便回数が少ない	130	21.3	180	26.9	<0.05	*
便の色	8	1.3	15	2.2	0.214	
夜泣き	17	2.8	51	7.6	<0.001	***
泣き止まず	7	1.1	41	6.1	<0.001	***
泣く原因不明	28	4.6	104	15.5	<0.001	***
泣きへの対応	14	2.3	43	6.4	<0.001	***
湿疹・乾燥肌への対処	175	28.7	271	40.4	<0.001	***
おむつかぶれ	30	4.9	57	8.5	<0.05	*
あざ・血管腫	32	5.2	46	6.9	0.226	
受診のタイミング	61	10.0	126	18.8	<0.001	***
医療機関の選択方法	64	10.5	98	14.6	<0.05	*
児の病気	10	1.6	17	2.5	0.264	
予防接種	105	17.2	148	22.1	<0.05	*
遊び場所	70	11.5	117	17.5	<0.01	**
保育所	96	15.7	148	22.1	<0.01	**
育児支援サービス	57	9.3	100	14.9	<0.01	**
母親の体調	38	6.2	87	13	<0.001	***
夫や家族	7	1.1	29	4.3	<0.001	***
上の児への関わり方	43	7	122	18.2	<0.001	***
生活リズム	45	7.4	90	13.4	<0.001	***

・検定は χ^2 検定ないしFisherの直接確立法

・有意に関連のあった項目を*** (0.1%未満)、** (1%未満)、* (5%未満) と印した。

・気持ち良好群は「良好」を選択した人、気持ち良好以外群は「やや良好」、「普通」、「やや不良」、「不良」のいずれかを選択した人とした。

(3) 母親の感情と夫の協力、相談者数との関連

児の出生順位が遅くなる、夫の協力頻度が高くなることと母親の感情が良好に向かうことに有意な関連がみられた ($p<0.001$)。母親の育児の相談者数が多くなることと母親の感情が良好に向かうことに関連がみられた ($p<0.001$)。

(4) 母親の感情と育児の情報源との関連 (図3)

母親の育児の情報源は「ネット・SNS」344人 (54.1%)、「家族」283人 (25.8%)、「友人・知人」143人 (13.1%)、「書籍」47人 (4.3%)、「専門職」21人 (1.9%)、「その他」9人 (0.8%)であった。良好群と良好以外群の2群に分けると良好群の母親の情報源は、「ネット・SNS」248人 (46.7%)、「家族」175人 (33.0%)、「友人・知人」78人 (14.7%)、「書籍」17人 (3.2%)、専門職9人 (1.7%)で人を介しての情報は262人 (49.3%)であった。一方、良好以外群の母親の情報源は、「ネット・SNS」344人 (61.0%)、「家族」108人 (19.1%)、「友人・知人」65人 (11.5%)、「書籍」30人 (5.2%)、専門職13人 (2.3%)で人を介しての情報は186人 (33.0%)であった。両群を比較すると気持ち良好群は気持ち良好以外群よりも人を介する情報の割合が有意に高かった ($p<0.001$)。また、良好以外群の中で不良あるいは、やや不良と回答した母親15人は、ネット・SNSからの情報が最も多く13人 (86.7%)、友人・知人は2人 (13.3%)で家族、書籍、専門職に回答した母親はいなかった。その中でも気持ちが不良と回答した3人の母親の情報源はすべてがインターネット・SNSであった。

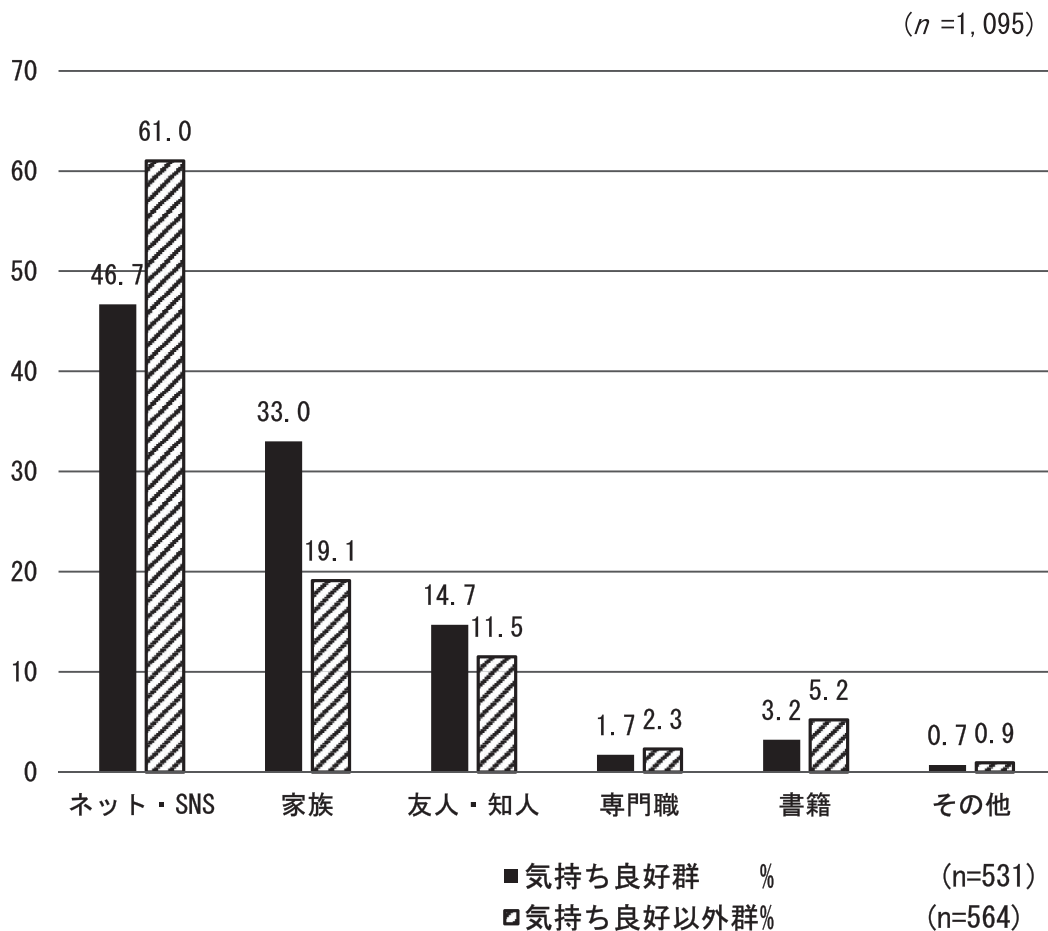


図3 母親の感情別育児の情報源

IV. 考察

本研究の母親の平均年齢は31.2歳、父親の平均年齢は33.0歳であった。全国と比較すると母親30.7歳、父親32.8歳ではほぼ同様であった。児の平均出生時体重は本研究が3,090 g、全国平均が3,020gで本研究対象が70g多かったが、本研究では対象から低体重児や多胎児を除いた影響も一因であると推測される。

1. 子育ての悩み・問題

カテゴリー別で母の悩みや問題が3割を超えた内容について考察する。

1) 【肌のトラブル】に関する悩みや問題

【肌のトラブル】の下位項目を選択した母親は532人(41.6%)で最も多かった。出生順位では第1子を育児する母親は53.3%と半数以上で、第2子以降においても32.4%と3割以上が選択した。下位項目において最も多かったのは「湿疹・乾燥肌への対処方法」で446人(34.8%)であった。第1子は46.1%、第2子以降は25.9%で両者に有意な差がみられたが、第2子以降も約26%の母親が対処方法に困っていると回答している。産後1か月児の母親の心配事は、湿疹や黄疸など皮膚に関するものが34.5%と最も多い(島田, 2006)が3か月児健康診査における相談についても皮膚トラブルの湿疹・アトピーなどが33.6%で最も多い(村井他, 2014)と報告がある。本研究結果とこれらの報告から出生後から少なくとも乳児健康診査までは児の皮膚トラブルが続くと考えられ、母親の悩みはしばらくは継続することが予測される。乳児の表皮は、大人に比べて角質が薄く、生後2～3か月頃までは脂腺機能が生理的に亢進するという特徴がある(山本他, 2005)。そのため、乳児の皮膚トラブルを予防するためには生後早期からのスキンケアが必要であるが、実際に実施している母親は少なく、皮膚トラブルが出現してから始める母親が多いと報告されている(高橋, 2020)。母親は妊娠期から自治体や医療機関で新生児の育児について学ぶ機会はあるが、皮膚トラブルの予防や個別性を重視したスキンケアの具体的な方法についての支援が不十分であったことも推測される。近年の研究で乳児期の湿疹の存在がその後のアトピー性皮膚炎や喘息、食物アレルギー等のリスクになると報告がある(古田, 2015)。アトピー性皮膚炎は、掻痒感・湿疹などの症状が慢性的に繰り返され「将来治るかという心配」「子どもが皮膚を掻いているのを見るのがつらい」といった保護者の声を赤嶺ら(2010)は報告している。保健師等は、妊娠期からエビデンスに基づき皮膚トラブルの予防方法やスキンケアを具体的に母親に伝える必要がある。また、産後早期に新生児訪問やこにちは赤ちゃん訪問を実施しスキンケアへの支援を行い、必要時は専門医につなげることも大切だと考える。

2) 【栄養】に関する悩みや問題

【栄養】は459人(35.9%)の母親が選択し、【肌のトラブル】に次いで多かった。下位項目では「授乳量の過不足がわからない」を約3割の母親が選択していた。授乳の種類は、母乳47.0%、混合45.3%、人工7.7%であった。栄養法を出生順位でみると第1子は混合53.6%、母乳38.6%、人工7.8%の順に多く、第2子以降は母乳53.6%、混合38.8%、人工7.6%の順で、第1子は半数以上が混合であったが第2子以降では半数以上が母乳であり両者の順位が逆転した。母親の悩みや問題を栄養法別にみると混合栄養が母乳・人工より悩みや問題を抱えている母親が有意に高かった。第2子以降で混合栄養が減り母乳のみの授乳が増えることから、一人目の育児経験が第2子以降を育てる母親の自信につながり、児に適切な母乳量の見極めがつくようになったことが一因と推測される。本研究は、横断研究であり両者の因果関係は不明だが、混合栄養の母親は母乳量が不足

していないかが心配で人工栄養を足している可能性が考えられた。母乳不足が不安なために安易に母乳をあきらめることがない様、特に第1子の母親に対しできるだけ母乳を継続していけるような支援が必要である（都筑&金川, 2001）と言われ、母乳から混合に移行しやすい1か月前後の時期は特に母親の母乳量への心配について耳を傾け支援する必要がある。入院中の母親は授乳に関して助産師などから手厚い支援が受けられるが、帰宅後は母親の判断で授乳を行うこととなる。保健師等は、早期に赤ちゃん訪問を行い母親を支援し必要な事例は医療機関や助産所等につなげていく役割があると考ええる。

3) 【疾病】に関する悩みや問題

【疾病に関すること】は、431人（33.7%）で3割以上の母親が選択した。下位項目で高い順に予防接種19.7%, 受診のタイミング14.6%, 医療機関の選択方法12.8%であった。世古ら（2006）は予防接種が大切と認識している母親は約98%でそのうち副反応が心配、子どもの体調がよくないと回答している母親が各々約3割で、就業している母親はそうでない母親と比較し予防接種の時間が取れないと回答したと報告している。第1子と第2子以降の母親の選択を比較すると、第1子は34.8%と3割以上であるが第2子以降は8.0%と1割未満で心配が激減していた。これらの結果より、予防接種に不慣れな第1子の母親、予防接種の副反応や子どもの体調の心配をしている母親、就業している母親など個々の背景に合わせた支援が必要であると考ええる。公衆衛生上感染症の流行を抑えるためにも母親の悩みに耳を傾け乳幼児早期の予防接種の意義を伝え推奨していくことが重要である。

4) 【排便】に関する悩みや問題

【排便】に関する悩みや問題は、413人（32.3%）で約3割の母親が心配していた。下位項目では、便の「回数が少ない」が最も多く310人（24.2%）の母親が選択した。便の「回数が多い」63人（4.9%）、「便の色」23人（1.8%）、「その他」34人（2.7%）であり、母親は排便回数の多さより少なさ（便秘）を心配していた。排便回数を栄養法別にみると母乳のみを授乳している母親はそうでない母親と比較し排便回数の少なさに関する心配事は有意に低く（ $P<0.001$ ）、これは母乳栄養の乳児は便秘が少ないという事実や哺乳不足も関係していると考えられる。乳児期の便秘は年長児になっても便秘になるわけではなく多くの症例は成長とともに改善すること、重篤な症状にはならないことを母親に理解していただくことが必要（松藤等, 2007）である。支援者は便の回数だけに着目せず本児の体重、体調、食欲、機嫌などを考え合わせて対応し、乳児期の排便状況は変化していく事を母親にしっかりと伝えることが必要だと考える。

5) 【育児サービス】に関すること

【育児サービス】に関する悩みや問題は、387人（30.3%）で約3割の母親が心配していた。下位項目では「保育所の申込み」を選択した母親が30.3%で最も多く、次いで「遊び場所」、「その他」が各々約1割であった。全ての項目において第1子の母親の選択が第2子以降と比べ非常に高かった（ $p<0.001$ ）。第1子の母親は地域の社会資源に不慣れであるため、保育所申込みのタイミングや手順、初めて利用する育児サービスへの戸惑い等があると考えられる。そのため、支援者は育児サービスに係る資料提供や説明だけではなく、先輩ママから生の声を聞けるような場の提供なども必要であると考ええる。育児サービスの利用は、生後4か月以降から多くなるという報告（小澤他, 2011）があるが、今回の研究結果からそれでは遅いため、第1子は特に乳児家庭全戸訪問事業（以下、こんにちは赤ちゃん訪問）などをできるだけ早期に行い育児サービスについて伝えることが必要である。

2. 母親の感情とその関連要因

1) 母親の感情と悩み・問題・夫の協力

5件法で感情が良好と答えた母親は約半数で不良に向かうほど割合は減っていった。母親の感情を良好群、良好以外群の2群に分けると各々約5割であった。悩みや問題と感じている項目数が多い、児が第1子、夫の育児協力の頻度が低い、育児の相談者数が少ない母親は良好以外群に有意に多くみられた。これらのことより良好以外群の母親は悩みや問題が複数存在し、周囲に相談する人が少ないことがわかった。母親の感情と悩み・問題は児に関することだけでなく自身の体調や家族をはじめ地域の育児サービス、保育所の申込みなど内容が多岐にわたっていることが確認できた。これらのことから、良好以外群に対しては、タイムリーに相談できる人の存在が欠かせず、身近な相談相手として夫の存在は大きい。夫の育児への協力の重要性を示した文献はいくつかある（笠井&河原, 2008）が、公衆衛生分野においては母親の産後のうつ予防やサポートの観点からも父親の育児参加が求められている（加藤ら2022）。本研究では9割以上の夫が育児を協力すると回答があったが、夫との関係性や会話時間、母親への精神的サポートなどその詳細については不明である。夫の支援が難しい場合は身近な相談先が必要であり、保健師はそういった事例を早期に把握し必要時地域の社会資源につなげるコーディネーターとしての役割を担う必要があると考える。また、妊娠中から産後において心配事・困り事の多い母親は医療機関で手厚い支援を受けていると思われるが、退院前に医療機関から地域へ情報提供がなされることで退院後も切れ目ない支援が継続できる。現在、医療機関と自治体の連携は地域により温度差があるため、各自治体は母親が利用する医療機関に積極的に働きかけ地域連携システムを構築していく必要がある。

2) 母親の感情と・育児の情報源・相談者数との関連

育児の情報源で最も多いものを聞いたところ良好群は約半数が家族、友人・知人、専門職といった「人」を選択し、良好以外群は6割以上が「人以外」のインターネット・SNSを選択し大きな差を認めた。両者の因果関係はわからないが、相談者がいない、もしくは限られているためにネットなどの社会資源を利用していることが推測された。都築&金川（2001）は、多くの育児情報が氾濫している現在、情報の洪水は育児への不安を引き起こす。正しい情報提供に努め、情報を見極める力を養うような支援体制が必要であると述べている。また、足立（2021）は子育て期の親が助言やサポートを得る機会が減少し母親の育児不安は増大していると述べている。つまり、情報は増大しているが「人」からの直接支援が減少していることも母親の育児不安に影響を与えていると考えられる。保健師がそのような母親に対し、地域の子育てサロン、育児教室、子育て支援センターなど近隣の母親や専門職など「人」と接することができる地域の社会資源につなぐことで、母親の育児の悩みなどのストレスは軽減されると考える。

3) こんにちは赤ちゃん訪問事業の時期

育児期の母親の労働時間は今後ますます増加していくと予測される。母親は子どもとじっくり関わる時間が以前より短縮し、身近な手本がいないために育児の悩みや問題を感じ不安を抱きやすいつと考えられる。柴田（2021）は、母親が仕事をしながら抱える葛藤で圧倒的多数を占めるものは仕事と育児の両立に関するものであったとし、ワーキングマザーは「時間のなさ」や「育児の先行きが見えにくいために仕事の予定が立てられない」という問題が常に横たわっていると述べている。かつて保健師は乳児（3～4か月児）健診で初めて対象者ほぼ全員の心身の状況を把握しながら育児相談を行っていたが、本研究で1～2か月児においても8割以上の母親が悩みや

問題を抱え約半数の母親がネガティブな感情を持ちながら育児をしている実態が明らかになった。この時期の母親の悩み・問題は様々であり、出生順位による差はみられたが、そうでない項目もあり個別支援の重要性が示唆された。また、悩みや問題は母親のネガティブな感情とも関連がみられた。

国は、こにちは赤ちゃん訪問事業は生後4か月までに行うこととしている（厚生労働省、2007）が、本研究結果より乳児健診以前の早い時期に個別のアウトリーチ型子育て支援として対象となる全家庭を訪問することが重要であると考える。松原ら（2012）は、母親の抑うつと育児困難感強い関連を持ち、0-1歳児の母親の調査において母親の抑うつが育児困難感を高めると報告している。赤ちゃん訪問事業による支援は母親の育児不安の軽減や、育児肯定感の向上に効果があると報告（島田、杉原、&橋本、2019）されている。また、緊急性の高い事例や治療が必要と思われる事例についても早期に発見し医療機関や関連施設に繋げ保健師等が継続支援を行うことで母子ともにその後の経過にいい影響を与えると考える。

3. 本研究の意義と課題

本研究の結果から1～2か月児を育児する母親に様々な支援が必要であることが明確になり、エビデンスに基づきこにちは赤ちゃん訪問早期実施の必要性について提言できたことは意義があると考えられる。

一方で本研究は、横断研究であり母親の悩み・問題と感情との因果関係まではわからなかった。研究方法においては、face scaleを尺度として用い各段階のfaceを筆者が操作的に定義したが、face画を個々の回答者がどの様に解釈したかはわからず、その点は本研究の限界である。また、A県5市5町という限定された地域での調査であったため今後は分析対象数を増やし、縦断的な調査を行うことで更なる知見が深まると考える。

V. 結論

- ・1～2か月児を育児する母親の最も多かった悩みや問題は「湿疹・乾燥肌への対処」で3割以上であった。出生順位でみると約6割の項目で第1子が2子以降と比較し有意に悩み・問題が多かったが、約4割は出生順位に関連がなかった。
- ・母親の気持ちを良好群と良好以外群に分類すると両者はほぼ5割であった。
【肌トラブル】の「湿疹・乾燥肌」、【児の泣き】下位4項目、【本人や家族】下位4項目、【授乳】下位2項目等を選択した母親に良好以外群の割合が高かった（ $P<0.001$ ）。育児の情報源が「人」からの母親は良好群に多くみられた（ $P<0.001$ ）。
- ・1～2か月児の母親の8割以上が悩みや問題を抱え母親のネガティブな感情とも関連していた。このことより、保健師等が行うこにちは赤ちゃん訪問は乳児健診前の早期にアウトリーチ型事業として実施することが重要であり、早期の訪問が母親のメンタルヘルスへの支援にもつながることが本研究より示唆された。

謝辞

本研究にご協力いただきました対象者の皆様、愛知県市町村保健師協議会知多半島部会保健師の皆様に深謝いたします。利益相反に関する開示事項はありません。

文献

- 足立安正 (2021). 産後1か月の子育て状況と産後6か月の母親の育児不安との関連～第1子と第2子以降の違い～. 摂南大学看護学研究. Vol.9. No.1.11-2
- 赤嶺千佳子, 福地哲子, 國吉江利 (2010). アトピー性皮膚炎患児を持つ保護者のQOLに関する験的調査. 沖縄の小児保健. 37, 47-51
- 古田祐子 (2015). 乳児の肌トラブル発症に影響を及ぼす沐浴教育要因. 福岡県立大学看護学研究紀要. 12, 1-11
- 笠井真紀, 河原加代子 (2008). 育児支援に関する県有の文献レビュー. 保健師による育児支援における現状と課題一. 日本地域看護学会誌. 10 (2) 14-19
- 加藤承彦, 越智真奈美, 可知悠子, 他 (2022). 父親の育児参加が母親, 子ども, 父親自身に与える影響に関する文献レビュー. 日本公衆衛生雑誌. 69 (5) 321-337
- 厚生労働省 (2020). 2020年3月告示第13号乳児家庭全戸訪問事業 (こんにちは赤ちゃん事業) 実施要綱. <https://www1.g-reiki.net/city.kitsuki/act/frame/110000385.Htm>. (2023.10.2閲覧)
- 厚生労働省 (2020). 新子育て安心プラン. https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_15982.html (2022.10.2閲覧)
- 厚生労働省 (2021). 国民生活基礎調査の概況. https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_15982.html (2022.10.2閲覧)
- 厚生労働省 (2022). 国民生活基礎調査結果の概況. <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa22/index.html> (2022.10.2閲覧)
- 松原直美, 堀田法子, 山口孝子 (2012). 育児期の母親の抑うつ状態に関する縦断的研究. 小児保健研究. 71 (6), 800-807
- 松藤凡, 中村晃子, 中川真知子, 他 (2007). 健常乳幼児における排便状態の変化と便秘. 日本大腸肛門病会誌. 60, 923-927
- 村井智郁子, 林知里, 横山美江 (2014). 母親の育児に関する相談事と背景要因-3日月児健康診査のデータ分析から-. 日本公衆衛生看護学会誌 JJPHN. Vol3, 2-10
- 内閣府 (2022). 少子化社会対策白書. https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/white_paper/measures/w-2022/r04pdfhonpen/r04honpen.html (2022.10.8閲覧)
- 内閣府 (2020). 少子化社会対策大綱. https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/law/pdf/r020529/shoushika_taikou.pdf. (2022.10.2閲覧)
- 中野明德 (2017). ボウルビイの愛着理論—その生成過程と現代的意義—. 別府大学大学院紀要. 19, 49-67
- 小澤若菜, 石川麻衣, 川上理子, 他 (2011). 高知市との連携活動強化事業・第2報—乳児家庭全戸訪問事業から把握した母子の健康と子育ての実態—. 高知県立大学看護学編. (61), 25-36
- 世古留美, 川戸美由紀, 橋本修二, 他 (2006). 母親の予防接種に対する認識と接種状況. 日本公衆衛生雑誌. 53 (12), 884-888
- 柴田彩千子 (2021). 子育て中の母親の抱える葛藤に関する一考察—母親を対象とした学習機会のデザインに向けて—. 東京学芸大学紀要総合教育科学系. 72, 351-361
- 島田三恵子, 杉本充弘, 縣俊彦, 他 (2006). 産後1か月間の母子の心配事と子育て支援のニーズ及び育児環境に関する全国調査. 小児保健研究. 65 (6), 752-762

- 島田葉子, 杉原喜代美, 橋本美里. (2019) 育児ストレスや育児不安, 育児困難を抱える母親への育児支援の実際とその効果についての文献レビュー, 足利大学看護学研究紀要.7 (1), 69-81
- 総務省 (2022). 労働力調査. <https://www.stat.go.jp/data/roudou/sokuhou/nen/ft/index.html> (2022.10.2閲覧)
- 高橋育子, 佐藤幸子, 今田志保, 他. (2020) 乳児のスキンケアに関する文献検討. 山形医学. 38 (1), 43-50
- 都築千景, 金川克子 (2001). 出産後から産後4か月までの子をもつ母親に生じた育児上の不安とその解消方法—第1子の母親と第2子以上の母親における比較—. 日本地域看護学会誌.Vol.3, No1, 193-198
- 山本一哉, 島岡昌幸, 蜷川とし代, 他. (2005). 新生児・乳児に関するスキンケア及び洗浄製品の使用経験. 日本小児皮膚科学会誌. 23 (2), 167-178

Relationship between Worries, Problems and Feelings among Mothers of Infants Aged 1–2 Months

Yoshimi Hida, Toshiko Otsuka, Kazuko Obie

School of Nursing, Sugiyama Jogakuen University

Abstract

Purpose: This study aimed to understand the worries and problems experienced by mothers raising infant by clarifying the relationship between mothers' feelings and their worries and problems and discussing the support provided through an infant home visit program

Method: A questionnaire survey was administered for mothers raising infants aged 1–2 months in five cities and five towns in Prefecture A in Japan. The mothers' worries and problems (8 categories, 37 items) and feelings (on a 5-point Likert scale) were tabulated, and the relationship between the two was analyzed.

Results: Based on the responses, the mothers were divided into positive and not positive feelings groups, with 47.9% of the respondents in the positive group. The most commonly reported worry or problem was dealing with eczema and dry skin (34.8%). A significant difference was observed based on the birth order of the child for approximately 60% of the sub-items. Mothers who selected items related to the following categories tended to report more negative feelings ($p < 0.001$): eczema/dry skin and infant crying (four items), concerns about oneself and one's family (four items), and concerns about breastfeeding (two items). Among mothers who indicated that other people were their most common source of information on childcare, a significantly higher percentage were in the positive (49.3%) than the negative feelings group (33.0%) ($p < 0.001$).

Conclusion: More than 80% of mothers raising infants aged 1–2 months had worries and problems, which were related to mothers' emotions. Regarding childcare information sources, the positive feelings group often sourced information from "people" such as family and friends, while the not positive group often sourced information from "non-human" sources such as the Internet and SNS, with a significant difference between the two ($p < 0.001$). For this reason, it is important that public health nurses and others visit all families with infants and implement them as an outreach project at an early stage. This study suggests that early visits can also lead to support for mothers' mental health.

Keywords: Childcare; worries/problems; mothers' feelings; sources of information on childcare; Visiting all families with infants